

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	長村祥知
論文題目	中世前期公武関係の研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、承久三年（一二二一）に勃発した承久の乱について、前提となる公武関係、後鳥羽院の軍事動員、乱の実態を解明しようとしたものである。承久の乱は、後鳥羽院が鎌倉幕府の執権北条義時の追討を命じたものの、惨敗を喫して隠岐に配流され、公武関係が幕府優位に変化する画期となった重大な事件である。しかし、史料の不足もあって従来の研究蓄積は不十分であり、依然として公武対立を基調とする古めかしい理解が中心となっている。そこで、本論文は承久の乱について、公武間の協調関係や、後鳥羽と白河・鳥羽院政の連続性という新たな視点を基軸に、京の軍事情勢を重点的に分析するとともに、古文書学・思想史的な視点からも検討を加えたものである。 第一章「鎌倉前期公武関係と左右馬寮・院御厩」では、院の軍馬を管理する院御厩別当、またそれと関係しながら宮中の軍馬を管理する左・右馬頭の人事を検討している。鎌倉初期に院御厩別当となった一条能保は、源頼朝の妹婿であるとともに、後白河院の近臣でもあった。彼の動向から、公武関係が対立から協調に移行したのは、従来の指摘より早い文治三年（一一八七）頃とする。また後鳥羽院は院政期以来の伝統をもつ坊門家を起用しており、京における軍馬管理は幕府との関係だけでなく、院政期以来の伝統が重視されたとしている。 補論「平安後期の左右馬寮と院御厩」では、院政期における院御厩別当、左・右馬頭の人事を解明し、馬寮の実態、院御厩別当との関係等、第一章の前提となる事実を提示している。 第二章「後鳥羽院政期の在京武力と院権力—西面再考—」では、評価が一定していなかった後鳥羽院による軍事動員の実態を解明する。その結果、従来後鳥羽院の武力の中心とされてきた西面は、小規模な武士が集合した部隊に過ぎず、白河・鳥羽院政期に活躍していた京武者も弱体で、主力は鎌倉幕府の在京御家人であったこととする。また動員対象となった御家人は特定の人物ではなく、一時的に在京した者も含まれていたことから、後鳥羽院が主従関係ではなく公的権限で動員していたこと、白河・鳥羽院と同様、基本的に全ての在京武力を動員しうる権限を有していたこと等を論じている。 第三章・第四章では、承久の乱に関する史料的限界を克服すべく、古文書学的方法で、既知の史料の見直しを企図している。まず第三章「承久三年五月十五日付の院宣と官宣旨—後鳥羽院宣と伝奏葉室光親—」では、慈光寺本『承久記』所引の院宣を取り上げ、現存する後鳥羽院発給の全ての院宣と対比して、その文言の共通性を確認するとともに、物語叙述との関係、後世の史料との対比等から、従来疑問視されてきた院宣の実在を確認した。			

そして、院宣の奉者葉室光親は、同時に伝奏の立場で宣旨の発給にも関与したこと、院宣・宣旨双方の発給の中心にいたために、公家でありながら死罪となったことを指摘している。

第四章「承久鎌倉方武士と『吾妻鏡』—『吾妻鏡』承久三年六月十八日条所引交名の研究—」では、表題に掲げた交名を分析した。まずこの史料が鎌倉幕府の軍奉行後藤基綱の作成であることを指摘し、『吾妻鏡』に関する史料的分析を行った。さらに、東国軍のうち、最多は武蔵、ついで相模の武士であることを指摘するとともに、交名から京方武士や武士の私闘など、従来の史料では未解明であった事実も掘り起こしている。

第五章「承久の乱にみる政治構造—戦況の経過と軍事動員を中心に—」では、承久の乱における京方・鎌倉方武士の動向について分析している。軍事動員形態が段階毎に変化したこと、東国武士は北条義時追討宣旨・院宣が発給されたことを知った上で無視したこと、京方・鎌倉方ともに所領獲得や私的利害に基づいて行動していたこと、後鳥羽は当初、権門的動員を行い、劣勢を知ってから公的動員を行ったが、時期を失したこと等を指摘した。これらを通して、京方・鎌倉方の武士動員から、強い共通性が看取されると述べている。

第六章「承久の乱における一族同心と分裂」では、承久の乱における一族分裂、逆に一族同心による京方伺候について検討を加えている。これらの事例を網羅した結果、背景にあったのは偶発的な思惑ではなく、武士における一族内分業、そして院・幕府という上級権力による強力な軍事動員であったこと、御成敗式目十七条の内容が、一族分裂・一族同心の事例に対応していたことを指摘している。

第七章「『六代勝事記』の歴史思想—承久の乱と帝徳批判—」は、承久の乱に関する思想的分析である。この章では、承久の乱直後に作成された歴史書『六代勝事記』を取り上げている。同書において、日本の思想史上で初めて、人間起因の歴史観が登場したこと、同書の帝徳論が平安後期貴族社会における帝徳批判を継承し明確化したものであること、そして同書の「帝徳批判と神孫君臨の併置」という思想の体系が、南北朝まで受容されたことを指摘し、承久の乱の思想史上の影響を論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、事件の重大性とは裏腹に研究蓄積が比較的乏しい感のあった承久の乱について、新たな研究視角に立って、丹念な史料の収集と先行研究の整理に基づき、政治史・古文書学・思想史の諸側面から検討を加えた労作である。

この論文の最も大きな意義は、通説における基本的に貴族と武士は対立し朝廷と幕府は敵対関係にあるとする理解を退け、公武を融和的に見る視角から、斬新な見解を提示したことである。承久の乱研究が手薄であった一因は、通説的な理解が根強く、新たな論点の提示が困難であったことにある。したがって、通説の克服を試みた点は、大きな意味を有する。

具体的な成果としては、まず第二章で後鳥羽院の軍事動員が公的な性格を有したことを指摘し、彼が率いた武力が幕府と対立的であったとする通説を否定した点を挙げることができる。こうした成果が生まれた前提には、第一章において、後鳥羽の行動・立場を既存の院政と断絶した特異な存在とする通説的理解を克服し、平安後期に全ての在京武力を統率した白河・鳥羽院政との共通性を見出そうとしたことがある。

さらに、これに関連して、第二章では後鳥羽方武力の中心とされてきた西面が、限定された存在であることを証明し、幕府御家人こそが主力であったこと、第六章では承久の乱における御家人の一族分裂も、一族内部の個別事情によるものではなく、院の強力な命令と一族分業に基づく必然的なものであったことを指摘するなど、注目すべき成果を挙げている。

また、新たな視点に基づく政治過程の見直しについても重要な論点が提示されている。まず第一章において、源平争乱以後の公武関係を見直し、通説より早い文治三年(一一八七)段階から公武関係が融和的であったとした点、また第五章において、承久の乱の勃発から、時間の経過に沿って武士の行動や意識を分析した点、同時に京・鎌倉双方の武士の行動に上級権力の命令を逸脱し、私的利害に基づく行動が顕著であったとする点などは、いずれも斬新な論点として注目される。

承久の乱に関する研究の進展を妨げた要因の一つが、史料の限界である。乱の研究は基本的に鎌倉幕府側の編纂史料『吾妻鏡』と、軍記物語である『承久記』に依拠せざるを得ないが、前者は幕府側の視点で作成され、後者は文学作品であるため、乱の京方の実態解明には困難を伴った。これに対し、本論文では第三章で慈光寺本『承久記』に掲載された後鳥羽院宣、第四章では『吾妻鏡』に掲載された鎌倉方交名という既知の史料を再検討し、その分析を通して新たな成果を挙げることに成功している。また、前者に関して中世前期における院の伝奏の存在とその役割を指摘した点は、古文書学的にも大きな成果であるし、第四章で『吾妻鏡』作成の素材を解明した点は、同書の研究においても大きな意味をもつものである。

さらに、第七章において『六代勝事記』を取り上げ、その思想を分析するとともに、歴史的意味を解明した点は高く評価できる。とくに、同書において初めて人間起因の歴史観が提示されたことを明らかにし、承久の乱における帝王後鳥羽の敗北が与えた思想的衝撃を具体的に指摘するとともに、その思想を平安時代以来の帝徳批判に位置づけた点は、思想史研究における大きな業績といえる。

このように評価すべき点も多い反面、不十分さも目につく。第一章では、院の御厩別当、左・右馬頭を取り上げるが、それらの軍事的性格が十分解明されておらず、こうした人事のもつ意味が不明確で、結論も隔靴搔痒の感が否めない。また、鎌倉幕府側の政治的動向、軍事動員に関する分析が欠落しており、承久の乱に関する新たな全体像を提示することもできなかった。さらに、後鳥羽と幕府の動員形態の相違、後鳥羽が敗北する必然性等も、残された重要な論点といえる。

以上のようにいくつかの問題も存するものの、これらは容易に解決できる問題ではなく、今後の課題とすべきものと考えられる。総じて、膨大な史料を丹念に解説するとともに、多くの先行研究を綿密に整理し、承久の乱に関する諸問題について、斬新な視点から分析を加え多大の成果を挙げた論文であることは疑いない。

以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）に値するものと判断する。平成二三年二月七日、論文内容とそれらに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。□

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降